



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861  
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 金子 敬  
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 遠くにおいて、近くにある希望

石原 明子  
いしはら あきこ

熊本大学大学院社会文化科学研究科  
准教授（紛争変容・平和構築学）

### ■祈りの中で与えられた出会い

「佐々木さんにいつかお会いしたい」という願いが、こんなに早く聞き届けられるとはその時には思いもよらなかった。恥ずかしながら、佐々木さんのことを最初に知ったのはそれほど昔ではない。昨年春か夏に、佐々木さんのご活動をインターネットで目にして、「へえ！日本人でこんな方がいるんだ！」と目が釘付けになった。同じころ、所属するルーテル教会の牧師が「バプテスト教会は、教会として平和のためにフィールドで働く方を送り出しているんですよ」という話をしてくれた。

そんな中、昨年9月に、メソナイト派のキリスト者で自分のICU大学の先輩で同じ平和学研究者である片野淳彦さんが、ルワンダにおられる佐々木さんをメールでご紹介して下さることになった。片野さんがウブムエの最新号を送ってくださり、読ませていただく中で、佐々木さんのご活動とその平和へのアプローチは、まさに自分が進もうとしている道のそのものである、と確信にも似た直感が湧いてきた。直接お会いしたこともなく初めてメールでお話させ

ていただく佐々木さんに、「私が今しようとしているプロジェクトのアドバイザーになっていただけませんか？」と、一方的な熱いメールを送ったのは9月末のことであった。

### ■日本でも紛争変容と平和構築を

私は、今、熊本大学大学院の交渉紛争解決・組織経営専門職コースというところで、紛争変容・平和構築学の教員として働いている。この熊本大学の大学院は、主に国内で働く紛争解決の実践家を育成するために、2008年に設立された大学院である。私たち一人一人のこころの葛藤から、身近な関係性の葛藤・対立、さらには組織や地域での対立や問題、そして国家や国際問題までを広く視野にいたした紛争解決学の大学院としては、おそらく日本で初めての大学院コースである。社会人を対象とした大学院で、いじめや非行の問題に取り組む学校の教員、医療事故を担当する看護師、NPOや会社の経営者から、ドメスティック・バイオレンスの問題に取り組む僧侶まで、20代から60代までの多様なメンバーが共に学び、日本と世界でどのよう

に平和を作っていくかに日々取り組んでいる。

私自身は、佐々木さんのルワンダでの和解の活動の哲学でもある修復的正義を専攻し、主に、東日本大震災による原発災害後の地域や家庭での葛藤や分断の問題に、平和構築の知見を用いて何が出来るかに日々取り組んでいる。私自身は、ちょうど2年前に修復的正義や草の根からの平和構築に力を入れている米国のイースタンメノナイト大学に留学し、そのノウハウをもって、日本でも生かせる紛争変容・平和構築学を構築していけないかと取り組み始めた矢先であった。この学問は、遠くにある内戦などの地だけでなく、日本にも必要な知であると確信をして取り組んでいるものの、現場での実践においては、日々暗中模索で非常に孤独を感じていた。そんな中、佐々木さんとの出会いがあった。

### ■佐々木さんとの時間でいただいたもの

今回の佐々木さんの帰国において、私は佐々木さんの西南学院大学神学部での授業の一部や、大名クロスガーデンでの講演、そして福島市での講演に同席させていただき、意見交換や日本でのプロジェクトへの助言をいただく機会をいただいた。このことは、自分がしようとしていることの意味を改めて、違った角度から確認し、背中を押される大切な大切な時間となった。

神学校での和解の授業と神学校の皆様との出会いは、私にとっても、何とも言えない霊的に満たされ変容する時間となった。ある神学生は言った。「この授業は、ルワンダの遠くて難しい紛争地の和解の問題を勉強するのかもしれない

た。でもそうではなかった。赦しも和解も、まさに私たち自身の生きる中に身近に、この私と神の間にあること。この授業はまさに私たち自身のことであった」。また、福島での講演会の参加者は言った。「今の福島には、原発災害の被害だけで悲しすぎるのに、そのうえ災害後の様々な立場の違いをめぐって分断があります。しかし今回ルワンダの地で和解の歩みの話を聴き、ヒントをもらった気がして、希望が湧きました」

### ■遠くにおいて、近くにある希望

佐々木さんの活動は、日本から遠く離れたルワンダの地に普段はある。しかし、その営みももたらすものは、決して、遠くて私たちとはかけ離れた希望ではない。今回の佐々木さんとの出会いを通じて、私は、佐々木さんがいてくださること、今の日本に生きる私たちにとっての意味を強く感じた。これほどまでに力強く、和解や平和構築についての実践経験と知をもち、「どんなに傷ついても、どんなに分断があっても、つながり直すことは不可能ではない」ということを多くの事例と確信をもって、日本語で日本人に伝えてくださる方がいてくださることの恵みとありがたさを、これほどまでに感じたことはなかった。佐々木さんは、ルワンダでの平和構築の活動に、日本人と韓国人の若者が共に参加して、アジアの和解と平和にもつなげていくプロジェクトも計画されている、という。佐々木さんの活動は、ルワンダで紡がれる希望であると同時に、私たち日本人にまさに働き、アジアにもつながる希望である。

## 新たに支援をくださった方々です。感謝致します。

(’13年8月1日～’14年1月10日)

白岡教会、吉田瑠都、山岡恵里香、武田由紀子、渡辺貴子、山本章子、山田誠一、福久織江、佐々公子、石原伴子、米本裕見子、松浦由佳子、野口文、土屋京子、角井一男、横濱峰二子、池内雪子、佐藤博信、中原早苗、東京北キリスト教会、荒木和子、原田寿里、永江桂子、吉野英之・きみ子、齋藤公子、若崎重武、藤沢バプテスト教会女性会、古賀バプテスト教会員、大橋ルツ子、鈴木恵美子(所沢在住) (以上敬称略、受付日付順、事務局より)

# ジェノサイド 20 周年 癒しと和解の旅

## 佐々木 和之

ささき かずゆき

今年4月、ジェノサイド20周年を迎えます。協働の果実としての子豚の誕生、平和・紛争研究科第一期生の卒業。癒しと和解の旅は今も続いています。

皆さま、ルワンダの平和と和解の働きのために、いつもお祈りとご支援をありがとうございます。今年4月、ジェノサイド20周年を迎えますが、私のルワンダでの活動も4期目が始まります。皆さまのお祈りとご支援がなくては、活動を続けることはできません。どうか第4期もよろしくお願いいたします。

### ■子豚の誕生に沸く村々

今号ではまず、私がこれまで現地 NGO リーチ (Reconciliation Evangelism and Christian Healing 略称 REACH) と共に進めてきた、草の根の「癒しと和解」のプロジェクトから嬉しいニュースをご報告します。本誌 24 号でお伝えした、キレヘ郡「協働養豚プロジェクト」の豚舎で待望の子豚が生まれたのです！

このプロジェクトは、「償いの家造り」を通して関係を修復した人々が、副収入と堆肥の確保のために協力して豚を飼育する取り組みです。これまで、東部県キレヘ郡の二つの村で実施されてきました。そのうちの一つ、ガフゾ村の協働グループ「ドゥハラニレ・ウブムエ・ヌブギンゲ」(「一致と和解に励もう!」、37 世帯が参加) が管理する豚舎で、1月8日、1頭の雌豚から5匹の子豚が生まれました！昨年10月、20頭ずつ飼育を始めてから約3か月。待望の子豚の誕生です。そして昨日(1月30日)、ルガンダ村の協働グループ「アバハラニラ・アマホロ」(「平和のために労する者たち」、23 世帯が参加)のもとにも5匹の子豚が生まれました！さらに、2月に出産予定の雌豚が、各豚舎に6頭ずついるのです。これから二つの村々で、子豚の

誕生を喜ぶ歓声が何度となくこだますることでしょう。



大虐殺から20年を経て、今、これら二つの村の人々が、憎しみやわだかまりを乗り越えて共に働き、その労働の果実を手にしはじめています。私がこの国で働きはじめてから8年が過ぎましたが、ようやくここまで来ることができた、との深い感慨を覚えます。彼らの癒しと和解への旅を共に歩んでくださった主イエスに、そして、祈りと支援をもってその旅を伴走してくださった皆様に感謝いたします。



＜ルガンダ村協働養豚グループとリーチ職員＞

## ■第1期生との最後の授業

昨年12月中旬、プロテスタント人文社会科学大学（略称PIASS/ピラス）で行なった「和解の理論と実践」という5日間の集中講義のことをご報告します。参加者は、平和・紛争研究科第1期生の5名、留学生の加藤麗さん、研修のためにしばらくピラスに席を置かれている日本人牧師と妻の恵の計8名。今年8月に卒業予定の第1期生と私の最後の授業でした。

第1期生の全員が、肉親か親戚を殺されたジェノサイド・サヴァイバー（虐殺生存被害者）です。大虐殺があった時には皆小学生でした。その彼らに和解について何をどのように語るることができるのか？私自身かなりの緊張を感じ、彼らの心理状態に配慮しながら、主イエスが私たちの真ん中にいてくださることを祈りながら授業を進めました。

聖書からの学び、社会科学的な観点からの理論的な学び、そして、私がリーチとともに取り組んできた「修復的正義による和解」の実践からの学び、そして、参加者の経験と思いの分かち合い等を通して、とても豊かで深い5日間になりました。



ルワンダ人の学生たちは、集中講義の様々な局面で、戸惑いや葛藤を正直に話してくれました。彼らの中で、自分の肉親を殺した加害者から謝罪された者はまだ一人もいません。自分を悲しみのどん底に突き落とした加害者への怒りが心の奥底にありながらも、それを抑え込んできたのです。しかし、今回の集中講義を通して、

学生たちはそのような自分の感情に向き合い、それを率直に分かち合ってくれました。そして、リーチの活動の中で赦しと和解の歩みを続けてきた人々のことを深く学び、そこに希望の光を見出したのでした。

集中講義が後半に入った3日目、朝の分かち合いの時間に、ジャンクロード君が穏やかな口調で言いました。「父親を殺した加害者を訪ねて話をしてみようと思う。和解は旅だ。自分もその旅を始めたい。平和構築を職業（vocation）とするからには、まず自分が和解への道を歩まなければ...」

大虐殺で父親を失ったもう一人の学生、サルジ君は、自分に言い聞かせるように、深刻な表情でこう言いました。「以前は、もう復讐するつもりもないから、問題は解決したと思っていた。でもあらためて、まだ彼ら（加害者）に対する怒りを持っていることに気付いた。以前は怒りや憎しみがあってあたりまえ、それでいいと思っていた。でも今は、それを乗り越える必要があると感じている...」

ジェノサイド20周年が、癒しと和解の旅を続ける彼らにとって、全てのルワンダの人々にとって、神様の慰めと励ましを受け、和解と共生への希望を確かなものとする、恵みの年になりますようにお祈りください。



＜集中講義終了後の記念撮影 — 飛び入りの  
コンゴ人留学生も一緒に＞

**佐々木 恵**

ささき めぐみ

**「和解」の集中講義に参加して**

昨年 12 月にもたれた 5 日間の「和解」をテーマにした集中講義、それは和之にとって、今年卒業予定の 5 人の教え子たちとの最後の授業でもありました。彼らは 2 年前、まだ始まったばかりだった平和・紛争研究科を初めて選択してくれた学生たちです。その彼らと、留学生の加藤麗さん、そして数ヶ月間 PIASS に席を置いておられる日本人の牧師先生と私、合計 8 人で受講しました。

ルワンダは今年 4 月にジェノサイド 20 周年を迎えます。その記念すべき時を迎えるにあたって、この時に行われた集中講義はとても有意義なものに思えました。5 人のルワンダ人学生は、全員がジェノサイドで家族を失っており、当時は小学生。彼らの心の中にもまだ、「和解」できないでいる事柄が閉じ込められたままになっていたからです。

講義の一日目の「REVER OF LIFE」という活動から、私たちはそれを垣間見ることができました。それは、自分の人生を川に例えて絵にしてみるという課題でした。活動の後に、描いたものを説明する時間をもつのですが、ジェノサイドが学生たちそれぞれの人生を一変させ、混乱させ、希望を奪い、人生の方向転換を強いた出来事だったということが、その絵からははっきりと見て取ることができました。彼らはそこに瓦礫を描き、波を逆巻かせ、堰を描き、そして死体を描いていたのです。

和解というテーマは、今を生きる学生たちにとって、自分自身の課題です。学びの一コマが、自分が今格闘している課題であり、家族の問題そのものなのです。一方、講師である

和之にとっても、「赦しと和解」は、今やライフワークになっているといえます。大学の博士課程では「ルワンダ・ジェノサイド後の正義と和解」について研究し、この国に来てからの 8 年間は、リーチの活動をとおして「赦しと和解」の現場を何度も目撃してきました。ですから講義の中では、その報告も具体的でまた、説得力を持ってなされました。当事者である学生にとっては、この経験は大学の講義以上のものだったと思います。彼らは集中講義で習う一つ一つのことを共感し、あるいは反発しつつ考えを巡らしているのです。



この秋結婚したばかりのシャントールは、「赦しと和解」の重要性を理解しつつも、ルワンダの社会では「赦し」が被害者側に強制されているように感じると告白してくれました。その感覚は彼女を深く傷つけ、そのことによって彼女は和解に対して、自らの心を閉ざしていたのです。私たちは、「赦しは義務、ましてや強制されるべきものではない」ということをここで確認しあい、「赦しは解放であり、神様からの贈り物であり、自発的な意志による行為なのだ」と

いうことを学びました。

毎朝の講義は、「分かち合い」の時間をもって始まりました。前日の講義をうけての感想や気づきを自由に発表するのですが、私たちはこの時、自分の心の痛みや葛藤、自分の心に存在していたにもかかわらず今まで気づかずにいた感情、そして希望を分かち合うことができました。その中で学生たちは、「和解はまず自分自身との和解がベースだ」ということ、「和解は政府の政策によるのではなく、自分たちの希望や信仰や愛に基づくものだ」ということ、また「虐殺生存被害者たちがそれぞれ思いを分かち合うことはとても大切で、そのことはまた、彼・彼女ら自身の恐れに打ち勝つことでもあるのだ」ということを自分の言葉で語りながら確認して行くのでした。そしてまた、その中から被害者の立場としてだけでなく、加害者の側にまで配慮した意見もでてきました。「和解は、被害者と加害者、両者の感情を理解するための旅路だ」、「被害者と加害者双方の感情や思いを分かち合うことがとても重要だ」と・・・彼らは講義をとおして自分の人生を振り返りつつ内容を確認し、そこに新しい考えも受け入れながら自分自身に

チャレンジしているのです。

ジェノサイド 20 周年を迎えようとする今、平和と和解を心から求める人たちの希望に基づいた選択が求められていると思います。20 年前の誤った選択を繰り返さないために、そして、未来を創造していくために、一人でも多くの人が、憎しみよりも愛を、あきらめよりも希望を、うずくまることより一歩前に踏み出すことを選択していかなければなりません。しかし、いまだに当時の傷はとても深く人生を傷つけ、そこから希望を掲げるにはあまりにも悲惨な経験をされた方々が多くいます。昨日も、20 年たった今になって自分の母親がトラウマの影響で何日も眠れず食事もとれず幻覚に悩まされているという学生が、その母親の看病のために夜間の講義を早退していきました。どうぞ、ルワンダの傷つき重荷を負っている方々のためにお祈りください。ルワンダの闇はまだまだ深いのです。しかし、私たちはその闇の只中から希望の光を掲げる者でありたいと思います。暗闇しか見えないような現実の中でも光は存在します。そして闇は光に決して勝てないのですから・・・

加藤 麗

かとう うらら

## ピースクラブが誕生しました

昨年の 11 月に PIASS の平和・紛争研究科の学生を中心とした新しいクラブ、ピースクラブが発足しました。ピースクラブはその名の通り、ルワンダや世界に存在する暴力をなくし、平和な社会を実現するために活動していく予定です。事の発端は 2 人の平和・紛争研究科の学生たちでした。「PIASS で学んだ『平和』は多くのことを教えてくれた。次はもっと多くの人に『平和』を広めたい」と PIASS 内でクラブを作り、PIASS の学生や地域に働きかけていくことを

決意したのです。その考えに呼応するように約 9 人の学生が集まりました。

先月 12 月にはクラブのメンバーを集める目的の下、PIASS の学生を対象に、第一回平和ワークショップを開きました。クラブの紹介や PIASS に内在する問題について意見の交換会を行ったのですが、議論は大変白熱し多様な意見が飛び交いました。例えば、PIASS における大きな問題の 1 つに授業料の問題があります。日本円にすると年間 7 万円程度の授業料でも、

ルワンダの方からすれば大金です。授業料の納入がままならず、留年や退学をする、進級のた



めのテストを受けることが出来ない学生が、驚くべき人数にのぼります。ディスカッションの中では生徒と教師役に分け、現実的にどのような打開策があるかを議論しました。このような議論は、外部からの支援に頼るばかりでなく、学生たちが自ら PIASS の問題を解決するための、意識の向上につながります。そしてワークショップ後、なんと 15 人程の参加者の全員がピースクラブへの加入を決意してくれました。

現在は PIASS の学生を対象に、日常の紛争解決法についてのアンケート調査を始めました。将来的に PIASS 内での学内ワークショップを開催し、他学部の学生にも平和についても知識を深め、平和活動に参加してもらうためです。メンバーの中には私を含めた 5 人の留学生（ブ

ルンジ、コンゴ民主共和国、日本）もおり、将来的には地域間での平和のための対話や、日本からのゲストとの交流を促進する役割を担えるでしょう。ピースクラブには色々な可能性があると感じています。

私は昨年 12 月をもって 10 ヶ月の留学を終えました。短い間でしたが、先進国では出来ない多くの経験をする事ができ、今ではルワンダに留学して良かった！と自信を持って言えます。数えきれない友だち、授業での活発な議論、田舎にて REACH のインターン、教会での交流、ゆっくりと流れる時間、芋・米・豆とバナナ尽くしの日々……。皆さんの中に少しでも興味が湧いた方がいらっしゃったら、是非訪問してみてください。肌でしか感じられないことが、たくさんあります。留学もオススメです。佐々木先生が多面でサポートして下さい、恵さんも優しく気遣ってくださるので心配はほとんどありません。人生で又とない経験をしてみませんか？

最後になりますが、佐々木さんを支援する会の皆さま、暖かく見守って下さり本当にありがとうございました。佐々木先生、恵さん、ルワンダのパパとママとしてこれからもよろしくお願ひします！私はピースクラブなどを通してこれからもルワンダの学生たちと関わり続けていきたいと思ひます。

## 帰国報告集会 2013

昨年の 11 月 10 日（日）午後、ルワンダから帰国中の佐々木和之さんの報告集会を、大井バプテスト教会（日本バプテスト連盟）にて行い（「支援する会」主催、連盟宣教部後援）、120 名を超える盛会となりました。

今回の報告会は、ルワンダでの活動の第 3 期

「佐々木さんを支援する会」世話人 中條 智子

が終了、4 月から第 4 期の開始という節目にあたります。佐々木さんには、ルワンダについての基本的なことがらから、これまでの働きの振り返り、そして、第 4 期に向けての展望（「ウブムエ」No.25）まで、たっぷりと語っていただきました。とくに第 3 期では「償いの家造り」

プロジェクトがキレヘ郡から他地域でも行われるようになってきていること。被害者の方たちの「癒しと和解のセミナー」だけではなく、加害者のためのセミナーも行われ、加害者と被害者が協働して家造りを行うことが起きていること。また、ピアスでの平和・紛争研究科の立ちあげ、養豚プロジェクトの開始など、働きが着実に大きく、豊かに展開していることが報告されました。

報告会で印象深く聞いたのは「和解の旅はプロセス」という言葉でした。和解は一気にジャンプして解決・オシマイではありません。一步一步のゆっくりとした歩みです。でも、次の世

代が憎しみを乗り越えていく姿を確かに夢見つつ、今を歩む方たちがおられます。その方たちに伴い、平和のために働く人を育てつないでいく佐々木さんの働きを応援したい思いを共有した報告会となりました。

報告会に初めての方が関心をもって多く出席してくださったり、帰国ツアーで初めての訪問となった教会や学校で新しい出会いがあったりして、新しく支援に加わる方たちが起されています。同時に、報告会の参加者に「一旦お休みしていただけれど、再開します」と言ってくださる方もおられて、世話人会としても、嬉しく励まされました。

## 事務局からのお知らせ

- ジェノサイドから20年。和解と平和、共生へと向かうルワンダの人々の歩みに、佐々木さんが寄り添って9年です。佐々木さんの発信は、日本に住む私たちに、「人間とは何者なのか」を問う迫りがあります。

ルワンダの人々の取り組みや、佐々木さんの息づかいを感じながら、この問いを大切に皆さまと分かち合いたいと願っています。第四期を迎えるにあたって、改めて皆さまの祈りとご支援をお願いいたします。

- 佐々木和之さんの今年の帰国報告は、6月下旬と、11月中旬の二回を予定しています。秋には、各方面の方々と協力して、シンポジウムを予定しています。詳しくは後日ご案内させていただきます。

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 金子 敬（古賀教会牧師）、中條智子（三島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、村上千代（日本バプテスト女性連合幹事）、播磨 聡（広島教会牧師）